



第2会場●2F 自由研修室

■司 会／紫園 来未 佐賀県 オフィスしおん 代表
弓削 暢彦 福岡県教育庁南筑後教育事務所 主任社会教育主事

分科会の進め方

13:30~13:35

1 放課後等の学び場に寄与するバンクの企画と運営

13:35~14:05

濱崎 博志(高知県) NPO法人高知県生涯学習支援センター 学び場人材バンク コーディネーター

「バンク」の目標は、「全ての子どもたちに豊かな学び場を！」である。県教育委員会の委託を受け、教育活動推進員、サポートー、支援員、学習アドバイザー、前講座講師等を大学生や一般から募集し、バンクに登録。放課後子ども教室や放課後学習室、放課後児童クラブなどの放課後等の子どもたちの学習や体験活動、遊びを支援している。現在、コーディネーター3名、協力者1名で運営し、人材の発掘、登録、紹介、マッチング、関係者のスキルアップ研修等を各自治体の教育委員会や関係機関との連携・協働で推進している。出前講座は27年度165講座、28年度は2月末現在175講座をコーディネートしている。課題は郡部での人材発掘である。

2 公民館を拠点とした「健康寿命延伸」プロジェクト

14:10~14:40

原田 僕三(愛媛県新居浜市) 泉川公民館 館長

高齢化は地元財政を直撃する。健康寿命を伸ばすことができなければ、介護保険料は増大の一途を辿る。現に、平成24年度現在で、介護保険料が全国で9番目に高く、健康保険料も愛媛県内でトップという報告が出た。「健康寿命を伸ばし、介護保険料を減らす」ことは必然の地域課題となつた。本館は、文科省の「公民館活性化プログラム」に応募し、自治会・老人会を巻き込んで包括的な健康づくりプログラムに取り組んだ。具体的には、エクササイズ・ウォーキング(一日1万歩運動)、学校支援地域本部事業への参加要請、「いきいき年輪塾」の開講、花いっぱいボランティア活動、傾聴ボランティアなどの呼びかけ、居場所づくりのアウトリーチ、自治会館での安否確認の集いを行なつた。

成果は着実に現れているが、事業のスピードを上げるために課題は関係機関間の連携やネットワーク化である。「健康寿命延伸」というテーマは、公民館の活動戦略を多角化し、明確化する点で大いに意味があった。

ティータイム

14:40~15:05

3 赤崎「男の料理教室」の10年 ～腕を磨き、認知症を防止し、家事の一役を担い、人々を繋いだ～

15:05~15:35

西村 仁優(鳥取県琴浦町) 赤崎「男の料理教室」 会長

永田 瑞穂(鳥取県琴浦町) 赤崎「男の料理教室」 副会長

赤崎は漁港の町である。10年前に8人でスタートした「男の料理教室」は「男子厨房にいるべし」をスローガンとした。若い世代も交え、現在会員数は72名となった。目標は、腕を磨き、認知症を防止し、家事の一役を担い、人々を繋ぐことである。本教室は自主運営・自主企画・自学自習で、プロの講師に依頼せず、そば打ちを含め、年6回の教室は、料理好きの役員が工夫をし、講師として開催している。自らの工夫で相互に学習している。メインは魚料理、予算は持ち寄り、レシピは簡易化して、日々の食卓に貢献することを目指している。教室の成果の披露を兼ね、各種の招待食事会を企画して、女性はもとより、町の関係者、知事や県議までを招待して、会員と地域をつなぐ工夫をしている。会員が増えすぎて、調理室が狭すぎるのが頭痛の種である。

4 障がい者の就労と地域の活性化を目指し、住民とともに 自助・共助の地域づくりを進める「秀溪園」の取組みについて

15:40~16:10

古城 芙美枝(大分県国東市) 社会福祉法人秀溪会 理事長

障がい者通所施設「秀溪園」は、障がい者の就労と自立を目的とし、近隣の高齢者の農地を借り上げて、米、麦、野菜などの栽培、家屋の掃除、草刈りの請負、弁当の宅配などを行なっている。ところが地域の少子化が同時に進行し耕作放棄地も増加して、すでに秀溪園だけでは請け負えない状況になっている。地域には新たな雇用を生み出す力は無く、医療・買い物の利便性も悪い。放置すれば地域は活力を失い、過疎化は免れない。地域の衰退は「秀溪園」の衰退に直結すると考え、地域の自助・共助を進めるため、県の補助を受けた実態調査を実施し、「仲間づくり」・「協議会の立ち上げ」・「農産物出荷の仕組みづくり」にとりかかっている。行政、社協、地域住民および当園の連携・協力によって、障がい者の就労、住民の収入の増加、利便性の向上など自助・共助の取組みが進み始めている。